例がある。

念射は如何であるか。念射は心の働きが物質に影響する事實である。心が物質に影響すると云事が一體あるだらうか。大にある。

手近い話が喜怒哀樂によつて人の顏が變るでは無いか。喜怒哀樂は心の働きで顏の筋肉は物質である。不快を感ずる時は眉と眉との間へ筋肉が集る。愉快な時にはそれが四方へ張り伸びた形になる。この原因結果を逆にして見ることが出來る。即ち不快を感じた時眉と眉の間を中心として、四方へ指で筋肉を伸ばすと、不快の思ひが忽ち除かれて、快活な心になり得る。又愉快な時にも所謂眉を顰めると、輕い不快を感じ來る。斯く筋肉と心とは實に密接の關係がある。喜怒の如きは一時的のことであるが、境遇によつて顏つきが變つて仕舞ふのも筋肉に心が影響する所による。學者は學者らしい顏をして居る。商人は商人らしい顏をして居る。重ね撮り寫眞と云者はこの點に興味を有つて試み始めたものである。この事の著しい例は巢鴨の葦原將軍である。(その後葦原皇帝と自稱し病院を巢鴨宮殿と號けて居る。)彼が自ら偉大なる將軍なりと云自信を得てから、全く顏つきが一變して威嚴のある容貌になつたのださうだ。余は彼が始めて皇帝と稱するに至つた頃病院に往つて彼に會つたが、成程端嚴侵すべからざる容貌をして居た。

冬の深更街を歩く時、ぶる〳〵震へて寒い時、寒くないとキッと思ふと、忽ち震へが止まつて、血の循環が盛んになる。

重い病氣でも、病人が癒ると強く自信して居るが爲に早く癒ることがある。所謂「氣でなほる」なるものである。どんな輕い病氣でも醫者にかゝらねば更に癒らぬ人がある。斯う云人は同じ藥でも、買ひ藥は利かず、醫者から貰つた藥は利くのである。

淺田宗伯であつたかと思ふ、或は違つて居るかも知れぬが、或漢方の名醫が旅行して邊鄙な村へ行つた。すると其村に大病人があつて、先生がお出でだと聞く

や強ひて診察を乞うた。先生は藥の持合せが無い、大に困つたけれど一計を案じ、窃に己が尿を藥と稱して飲ませた。病人はそれを飲むや快方に赴いたと云。これも可能の話である、其醫を信じきつて居る、先生にかゝれば必ず癒ると云、確信が病人にあるので、其心が生理的の結果を見るに至つたのである。

大隈伯が我は百廿五歳まで生きる、との自信を眞に强く持して居るならば、百廿五歳迄生きるであらう。

一體死と云との原因は多く心に原因がある。その原因から肉體に損所を起して死ぬと云とが多いやうである。試みに諸君の知人等の、死んだ人を回想して見給へ。其人は、爲さむとする事を爲し得て、其以上に何も企て得ぬとか、或は爲さむとする事が總て妨げられて落膽したとか、兎も角未來の光明と云ものを認めない場合、さう云時に、屹度人は死んで行くのである。醫者に云はせれば病氣は黴菌の爲に起ると云であらうが、その黴菌は到る所に浮游してゐる、それが或人を侵し或人を侵さぬと云には、もとより物質上の原因があるけれども、多くの場合に於て元氣があるのと無いのとが原因になる。元氣のいゝ即ち元氣の張つてる時には黴菌も之を侵すことが出來ぬ。氣が弛んだ時、人は病氣に罹る。大に氣が弛んだ時人は死病に取着かれる。所謂衞生法は肉體の末にのみ傾いて居る。元氣さへあれば、無病にして長壽である。元氣は死をも退け得るのである。唯之を保持するのに程度がある。若し三百年元氣を保持し得るなら、人は三百年生き得るであらう。

余の親族の子が、尖つた物を見ると、前額に痛みを感ずると云、一種の精神病に罹つたことがある。今は癒つたが、この子がこの病に罹つてる間其前額に傷が出來てゐた。病が癒ると共に其傷が癒えた。これは余が現前目擊した事實である。

余は少時斯う云話を聞いたことがある。小兒が針を踏附けた。其母がこれを見てハッと思つた。其後この母の足の裏に、子と同じ傷が出來たと云話である。我々

でも、人が目の前で負傷するを見る時、ハッと思つて、自分も同じ場所に負傷する如く感ずることがある。斯う云ことが強く起つた場合にはこの話のやうなことが起るかも知れない。

精神病の本を讀んだら、斯う云ふことがあつた。「淋病神經衰弱」と云病氣がある。これは淋病に罹つてこれを非常に苦にし、いろんな療治をして見る。どうしても癒らぬ。斯う云のはもはや淋病では無くて、淋病神經衰弱に罹つたのである。この治療法は、一切淋病の療治を止めて仕舞つて、淋病の事を忘れしめるにある。と云のである。

寒中に單衣一つで神社へ走る。理窟上、寒參りは十人が十人風邪をひかねばならぬ。所が實際左うでは無いのだ。元氣と、信仰の力は、能く皮膚を異常に強健ならしめる故である。寒參りは衞生上宜しくないと云ので、先達其筋から取締が出た。御親切なとではある。御親切にして且つ愚なとである。斯くして其筋は人を心無く肉のみ有る者に化しつゝあるのだ。

日露戰爭に行つた兵士の曰く、勇氣が張切るやうに覺えて進む時は、彈丸が滅多に中らぬ。勇氣の少ない時に、よく負傷すると。西洋の或催眠術家は、觀念の力を以て強い電流の衝擊を退け得たと云。

日蓮、龍の口で斬られむとした時、刀段々に折れたと傳へられる。これは事實では無かつたかも知れぬ。併し日蓮の如き强烈なる意力を有つて居る人には、これに似た事實が幾干もあり得たと余は信ずる。

平安朝には病氣の時藥を服することを卑しとして、貴族は皆祈禱で病を直した。祈禱が全く無効ならばそのやうに行はれることは無かつた筈である。心の働きの發達して居た其時代には、祈禱で大抵の病氣が直つたに違無い。

上古の裁判法に探湯と云ふことが行はれたは事實である。熱湯に手を突込んで掻回す。罪ある者の手は爛れ、罪無き者の手は爛れぬ。これを以て判決し得たので

ある。我は罪無き故に手爛れずとの確信を持つた人は、その信の力の爲に皮膚に火傷を發さなかつたのであらう。常に兩方とも火傷したならば、なんで此樣な法が行はれる筈は無いのである。源七と云老爺が、よく熱湯を探つて微傷だも負はぬと云ので觀覽場に出たことがある。余もこれを見た。これも意力を以て熱の働きを碍げ得たのである。

理學士金田楢太郎氏が三年程前に靈覺力を得たことがある。遠視も出來れば豫知も出來た。又力が非常に强くなつて、文部省に來た時、鐵の棒を譯無く折り曲げて人を驚かしたことがある。この力の强くなつたと云とは著く心の物質に及ぼす有樣を現はして居る。米國あたりの靈覺者は大抵この異常の力をおこすのである。當時氏は發狂したと云はれて居たが、三重縣の中學校長として、其職務は差支なくこれを務めて居た。今日では氏は全く普通の人になつて、當時のことを回想すると夢のやうだと云つて居る。

心の働きが物質に影響する事は、以上の事共で可能のことと考へられる。それのみにて念射を可能とは考へられぬ。併し更に念射を狹い意味に考へると、心の働きが光線の如く働く事である。この點を又素人眼で注視して見やう。

千八百九十八年に佛國巴里の大學教授キユリー氏は夫人と協力して研究の結果、ピッチブレンドと云礦物から、强烈なる光線發射力を有する一元素を發見した。是れが有名なラヂウムである。郁子婦人はラヂウムを使ふのでは無いかと山川博士等は疑つた。この事の爲に何だか、ラヂウムは心靈の敵のやうな感じがするのであるが、焉んぞ知らむラヂウムこそは實に心靈の近親であつて、又余がこに說く所の一視を暗示した靈物であるのだ。ラヂウムの光はX光線の透し得ぬ物をも透す。又其の光は物質を分解する强力を有つて居る。ラヂウムに照された元素は極微の光子となつて飛散し、あとに些の物質の痕跡を留めない。一斤のラヂウムは地球全體を分解せしむるに足る。原子と云物質が物の根元であると云說

は茲に於て破壞された。原子及び原子間の眞空が萬物を形成すとの說は破壞され た。ラヂウムに照されて飛散した光子、これを電子と名づける。この電子は物質に非ずして、電氣の働きある力その者であると云はれて居る。而して電氣と云ものはエーテルの波動なりと云はれて居る。さて一方にクルックスは精神感應の作用はエーテルの波動だと云つて居る。余が大學在學中元良博士より敎へられた心理學のうちにも、遠地に在る近親の死を知る等の精神作用、所謂蟲の知らせなるものはエーテルの波動の如き作用であらう、と云とがあつた。ラヂウム發見以來萬物の根元は物質で無い電子だと云とになつた。心靈そのものも同じく電子より成ると假定された。又電氣作用と心靈作用とは類似若しくは同一なりとは早くより歐米の學者に想像されて居た。電と心。茲に余は光と心、即ち心靈と光線との類似を推察し得られると思ふ。心の働きが光線の如く働くと云とは可能と思はねばならぬ。福來博士が念射の事に思及ぼしたのは千鶴子等に對する實驗の結果によつてである。必らずしも實驗の結果に據らずとも心の働き光線の如しと云とは考へられ得る。それに實驗の結果より思及ぼし、及ぼして試み、試みて現はれたるもの是れ念射である。福來博士が念射に思及ぼした順序及び念射の實驗は、先般理想團の演說に於て明かである。いづれ博士はこれを文にして公表するであらうから、余は茲に省く。寔にラヂウムは科學と哲學との合一の端緒を開いたものでは無いか。ラヂウムの强烈なる光は眞理そのものを照して人類の目の前に明確に示さむとしつゝあるのである。

先年見神と云ことが頻りに言囃された。井上(哲)博士がその見神者の談話を纒めて論じた中に、兎も角見神の時に大光明を見ると云とは皆一致して居る、と云とがあつた。見神の刹那は精神統一の刹那であらう　其時に光明を見ると云とは、心靈凝る時、そこに光線を生ずる(主觀的にもせよ)と云とである。こゝにも心靈と光線との類似を想像し得るのである。

佛教に月輪觀と云とがある。事は密教に屬し、且つ余は佛教そのものに頗る味いから、詳しくは知らないけれども、この月輪觀と云とは所謂精神統一の一階段であつて、一念を凝らして坐すると久しくして大月輪に似たる光體を目前に見得ると云とであるさうである。これにも心靈と光線との類似が察せられる。

西洋には精靈寫眞と云ものが前から注意されて居る。この起原は千八百六十一年の三月であつた。ボストンのマムラーなる者が寫眞を撮らせた。寫眞が出來上つて見ると、見知らぬ人がマムラーの姿の外に現はれて居る。古い種板を用ひたのかと思つて、更に撮らせて見たが、又寫つてる。ブラックと云寫眞師はこれに興感を動かして、嚴密に種板を吟味してマムラーを撮影して見た所が、やはり見知らぬ人の姿が別に寫つた。それでこの寫眞を紐育で公覽させた。マムラーは一時詭計を以て人を惑はすと云疑を受けて拘引されたが、事實と知れて許された。これが精靈寫眞の元祖であつて、この後マムラー以外の人の寫眞にも別人の姿が添つて現はれることが發見され、精靈寫眞は心靈研究家の一材料となつた。大氣中には無數の精靈が浮動してゐる。それが或媒介者に依つて不可思議なる働きを樣々やる。精靈寫眞の不思議な姿もこの精靈の姿である。と云說が起つた。精靈寫眞の中には媒介者（マムラーの如きを云）の全く見知らない者の姿の寫るともあれば、媒介者のみに見える者の姿の寫るともある。この媒介者の心に姿が見えてるのが、寫眞に寫ると云場合は、念射と相似た現象では無いか。ロムブロゾーの精靈存在說解決すれば別問題になる感があるが、それでも精靈は即ち心の凝つたもので、それが種板に感ずると云點は矢張り心の働きと光線との類似を現してるでは無いか。

心の物理以上に働く事斯くの如く、心の働きの物質に影響する事斯くの如く、心の働きと光線との類似を推測し得る事斯くの如くなれば、透視はもとより、念射の可能なることは素人考へでも推すことが出來る。しかも透視念射は事實であるの

である。

透視念射に關して兩學者の對杭を見るに、疑ふ物理學者には百千の理由がある。而うして信ずる心理學者には之を確明する一の理由も無い、唯事實がある、動かし難き事實があるのだ。事實を目前に見ざる俗衆の多くが、理由在る所必ず眞なりとの、最迷ひ易き迷ひに陷るは止むを得ぬとである。悲しい哉止むを得ぬとである。しかもこの迷を深からしめたに就ては、輕浮なる日本式物理學者の妄動が一因をなして居る。心理學者の無數の實驗の結果が秩序立てられて公表され、更に大學の如き學府に於て嚴密なる實驗を行うて透視念射が萬人に認められたる曉に於て、某々理學者の罪惡は十分に責めねばならぬ。肉薄して責めねばならぬ。知識の擴展を妨ぐる者は其罪殺人よりも重く且つ大である。

日本新聞紙上に鵜澤法學博士が「藤理學士を告訴せよ」と云論を載せた。そのうちに、今の理學者が學理のみを重んじて事實を輕んずるの非を鳴らし、議院建築委員會に於て、田中館博士が、音の反響に就て圓形と矩形との優劣を學理的に說明した時、自分は、學理上はさておき今日までの實際に於ては如何であるかと問うたらば、博士は其答辯は十日程猶豫を乞ふと答へた。怪しからぬ事である。と云とが書いてあつた。事實、これ程賴りになるものは無いのである。學理ももとより事實の上に築き上げられたものであるが、學理そのものにのみ目を注ぐ結果、狹き人は遂に事實を顧みぬに至るのである。氣象臺の天氣豫報よりも無學の漁夫の豫言が中るのはこの結果である。

水道管には鐵管よりも木管が適當であると云とが、近頃やつと解つて來た。然るに舊幕時代には既に木管の最も適する事を知つて之を用ひて居たのである。これを知つたのは學理研究の結果にあらずして、經驗即ち事實觀察の結果であつたのである。

余は千里眼事件に就て、又一般近頃の社會現象に就て「新しき者の迫害」とい

ふことをつくゞ感ずる。

コロムブスが大海の彼方に國ありと信じた理由は極めて薄弱なるものであつた。しかも彼には強烈なる直覺があつた。彼は世人の多くに罵られ或は笑はれた。彼と死生を共にせむとて隨つた僅な水夫ですら、國土發見の餘りに待遠しく覺束なきに惱んで、船中にコロンブスの身を危くせむとした。斯る迫害に堪へ斯る危險をも冒して、彼は米國發見なる大事業をなし得たのである。この迫害は、コロンブスが其時代の多數の信ずる所と異なつた事を言出したが爲である。

ジエンナが種痘を發明した其端緒は理論より見れば頗る薄弱なるものであつた。併し彼は直覺に勵まされて遂にこの人類に對する大貢獻を仕遂げた。大貢獻ではあるが、それは新しきものであつた。社會の原則通り、彼は當時非常な攻擊にあひ、惡戲をする魔法使ひとまで見られた。

「新」を鼓吹したが爲に迫害を受けた人の殆んど極端なる例はガリレオ、ガリレイであらう。彼は天動說が一般に信じきられて居る時代に於て地動說を確言した。時の政府學者宗敎家其他あらゆる種類の者が彼を劇烈に迫害して、生命をも奪はむとまでもした。一體地動說はガリレオに創建されたのでは無い。大昔希臘に於てピタゴラスが唱へたことがある。千五百年代になつて獨逸のコペルニクスが又地動說を唱へた。併しそれ等は餘程ぼんやりしたものであつたが、ガリレオは秩序立つた事實觀察の結果該說を確立したのである。彼は固體比重測定法を定め、物體落下の法則を發見し、寒暖計を發明し、屈折望遠鏡を發明した。天體觀測と云ことを始めてなしたのも彼である。月の自光體ならざる事、銀河の無數の小星より成れる事、木星に四衛星ある事、太陽に斑點ある事及び其の自轉する事、悉く彼の發見したる所のものである。斯る大學者たる彼が、天動說の非にして地動說の是なるを主張したのは然らざるべからざる所である。彼は、身遙かの天外に在つて、轉動しつゝある地球を眼前見る如き感があつたのである。彼は群がる迫

害者の前に立つて、我は殺すべし地動は止むべからず、と叫んだ。何といふ壯烈なる言であらう。しかし社會は殘酷である。彼が如何なる貢獻を社會に爲さうとも、如何なる幸福を齎さうとも、彼が新しき者なる以上彼を苦しめねば止まない。千六百十六年に彼は異教者の罪名の下に宗教裁判の審理に付せられ、强ひて、天動說眞なりと公言せしめられ、千六百卅二年宇宙系論を發表するに及んで、法王ウルバノ八世の爲に無期徒刑に處せられ、千六百卅三年にやうやく赦免されたが、千六百卅七年には既に體衰へて明を失するに至つた。

見知らぬ人が扉を開く。座中の人は先づ其者に怪訝の視線を注ぎ、之を厭ひ斥けむとする色を顯はす。これは實に人間の心の悲しむべき一傾向である。

透視念射の能力ある者、及びこれを信認する學者に對して迫害を加へ、詐僞師と呼び、愚昧者と呼ぶ者は、ガリレオの時代に在らしめば必ず彼を迫害する罪人であつたであらう。

甲を說明し得て、乙を說明し得ざる學は、眞の學で無い。範圍狹くとも眞を得たるものは、其儘一般に應用され得る。眞の戰術は亦處世術たり得べし。眞の劍法は亦道德律たり得べし。眞の數學は亦治國の術たり得る筈である。現在の知識を以て解き得ざる新現象が顯はれたならば、眞面目に其の現象を研究せよ、現象正確ならばその現在の知識なるものゝ何處かに誤謬があるのである。これを訂正せよ。斯くて人間の知識は擴大向上するのである。歐米の學者の態度は常に斯くあり今の日本の科學者はこの態度を持し得ぬのか。科學そのものにも不忠實と云はねばならぬ。

一視せよと余は叫ぶ。新しき者を斥くる勿れ。又同時に舊き者をも亡す勿れ。時代の潮流の勢を驅つて、舊き者を亡し去るのは、新しき者を迫害すると同じ程度の罪惡である。東海道は汽車で行ける。併し汽車の通る鐵路と俱に、東海道の舊道は今も保存されてゐる。詰り路が二つ出來たのである。故にこれを進步と稱

へ得る。若し舊道を全く亡して、鐵路のみにしたならば、それは必ずしも進歩とは云はれぬのである。

余は漢法醫の子である。漢法の功驗を屢見た。現時用ひらるゝ藥品中にも漢藥あることを知つてゐる。漢醫は繼續を禁ぜられた。その爲に社會は多大の損失を得たであらうと思ふ。

匿れたる一學者が古印度の天文學を確立せむとして今熱心に研究しつゝある。富豪平沼專三はこの一學者の爲に無際限に金を給與しつゝある。平沼の事業中この事が最も尊く余には思はれる。平沼は舊きを棄てずとの思念を持してゐるのだ。

本居宣長が古典を解釋するに際して、今の知識を以て測知し難き事柄に逢着する時は、其儘に解し置き、その事柄を、解釋し易きやうに變改するとは斷じてせぬ、と云ふ方針を立てた。寔に宣長は正しき道を行く人である。解き難きの故を以て一行一字をも亡すことはせぬ。總ての學はこの態度を以てせねばならぬ。

現代の科學的知識は完全なりと信じ切つてる人は狹小の人々である。不完全なることを感じてる人は廣く且つ大いなる人である。神祕的信仰が常に社會にあるのは、この不完全なりとの感覺の實現である。故伊藤公は所謂頭腦の明晰なる政治家であつた。それすらも卜筮によつて事を判定した事實がある。警視廳の或長官も屢卜者の言によつて搜査の方針を定めてゐる。

人の智は向上の途にある。頂點には達して居ないのだ。古代の希臘人埃及人印度人は多神敎であつて、己等が智を以て立て得られるだけの神々を立てゝこれを祀り、而して其他に「識らぬ神」なるものを立てゝこれを祀ることを怠らなかつた。是れ人間のよく己れを知る所の行ひでは無いか。日本現代の科學者には、この「識らぬ神」を祀る度量が無いのである。未知のものあるを覺え得ざる者は遂に向上無けむ。己が智識の範圍外なるが故のみを以て輕々しく之を侮辱し既に透

視の能力者たりし御船千鶴子をして、自殺の一動機を作つた所の某々科學者の罪は、吾人が輕々に看過すべき事では無いのだ。何ぞ世人の寛大なるや。

今の社會は小面倒なる煩はしき社會である。事々物々必ず裏面がある。隱れたる部分がある。人は皆面をかむつて動いてゐる。千里眼は斯る社會に現れたのである。直に裏面を見隱れたるを露はさむとする群衆心の要求が自ら千里眼を生せしめた感がある。

今の人は己が精神を輕んじて、唯周圍の事情のみに重きを置く。青年が專攻科目を選むに當つて、己が見識趣味を以て選まずして、先づ自己の周圍を見て定める。精神一到何事か成らざらむと精神力の重大なるを信ずるものは地を拂つた。千里眼は斯る社會に現れたのである。精神の力はよく、金鐵を徹し强烈なる光となつて物に其痕を印する底のものなることを、具體的に現して、輕浮なる現代人を警醒したる感がある。

千里眼確立せば、正者の外生存不可能となる。千里眼確立せば、人は事情を打破して邁進する勇猛心を振起す。物理學者よ、前非を悔いて更に眞摯なる態度を以て千里眼を研究せよ。心理學者よ、他の迫害に逡巡せず、一層の研究を積んで、衆を敎へよ。

物質研究も心靈研究も、ともに眞理を逐ふことに於て一致して居るでは無いか。相互に友と思へ、手を携へて進め。斯くて世は幾多の敎示を得るであらう。阿含經に曰く、

四河入海、同一鹹味。

その月々

落合直文

塵

鮓店の隣に水果子賣る露店あり。西瓜まくは瓜梨桃等並べたり。彼の子の見る

や母の袂にとりすがれり、母は聞かぬ樣して行く。子は泣きながら店の前に立ちて動かず。母は顏ふくらして足疾く立戻るよと見えしが、泣くなる子の手をきびしく捕へ、二つ三つ頭を打ちて引き立てゝ連れ行く樣荒々し。あはれよと見てある折しも又塵をあげて走り來る馬車あり。乘れる人はと見れば女なり。このはかなき母子を見よかしと思ひしに、塵をや厭ふらむ、雪より白きハンカチーフを顏におしあて、こも又知らで行き過ぎたり。

こゝに又砲兵工廠の方より、幾百人とも知らず人々の打群れて來るあり。初めは葬式にもやあらむと思ひしに、よく見れば同廠の職工なりけり。洋服着けて下駄を穿てる者あれば、紋付の羽織を着て股引を着けたるもあり。尻をからげたる者、腕をまくりたる者、シャツに袴着けたる者、右の足に長靴をはき左の足に半靴をはきたる者、草履と駒下駄と片方づゝに穿きたる者、白足袋と紺足袋と別々に穿きたる者、頬かぶりせる者、兵兒帶せる者、髮の長き者、短き者、坊主なる者

髯なる者、千態萬狀書き盡す事能はず。顏は更なり、背のあたり汗しみ出でゝ其の香いみじう臭きに、立騰る塵にまみれて進み來る樣得も云はず。あはれあはれ此も我が同胞兄弟なるよと獨り物思ふ折しも、又塵を揚げて走り來る馬車あり。此を見よかしと目を注ぎしに、乘れる人酒に醉ひたらむ打眠りながら、こもまた知らで行き過ぎたり。

故落合氏の「塵のちまた」と題したる文の一部である。砲兵工廠横の通り、夏の盛りの夕方の寫生である。貧しき者のあはれな樣をいろ〳〵に描いて行く。その一節毎に富める者が馬車を驅つて行く樣を書いてある。富める者が如何にも冷かな樣を書いてある。さうして光景を蔽ふに雲のやうに捲きのぼる塵埃を以てしてある。氏の文の中でも、餘程强みのある文である。子は水菓子を欲しがる。僅な錢も無い母はこれを打懲らして行く。車上の女は唯塵を吸ふを恐れ即ち己れを贅澤に守りつゝこれを見むきもせず過ぎ行く。砲兵工廠の職工が今歸ると

ころである。この光景は今も先づこんなものである。午後五時頃神田小石川の電車に乘つて水道橋春日町間を過ぎ見よ、毎日この光景を見るを得る。不秩序な蕪雜な其の職工等の裝ひが極寫してある。但し長靴と半靴、草履と駒下駄、白足袋と紺足袋とかた〳〵づゝと云邊は、筆が走つて虛僞になつたのでは無いかと思はれる。この文の出來た頃は果して斯う云樣であつたか知らぬが、少し虛僞が交つて居ぬかと思はれる。併し能く寫し出してはある。車上の男はこれを見ずして眠つて過ぎ行く。斯う云書き方をいくつも重ねて、最後に、「又馬車五六輛走り來ぬ。其の馬車我が傍を過ぐる頃、水道橋のわたり風吹き起りて塵雲の如く立ちあがれり。其の塵風のまに〳〵此方を襲ひ來りしが、瞬く間に人の往來も見えずなりぬ。あはれこの塵よ、彼の馬車のうちへも入れかしとかへり見すれば、塵の追ひ及ばざるうちに、馬車は早くも壹岐殿阪の方へと打めぐりてなむ。」と書いて結んだ。一節毎の馬車の人は、音樂の主題の働きをなして居る。主題とは或一の曲節が一曲中所々に顯はれるのを云ふ。六段のテンテットンの類である。この文中この主題毎に讀者をして、冷やかなる富者に對しての敵愾心を起さしめて居る。併し作者は決して、憎いとか怪しからぬとか云主觀を交へず、唯手巾で顏を蔽うて過ぎた、眠つて過ぎた等と全く客觀的に叙して居る。而して其最後に至つて、始めて塵よ馬車に入れと叫んだ。非常に重みのある言葉だ。耐へ切れずして發した叫びだ。しかも其の塵は馬車に禍せず、富める者は飽くまでも〳〵幸であるを叙したのは、何と云文章の妙であらう。貧者は貧なるべく所因あつて貧しいのではある。富者は富むべき所因あつて富んで居るのではある。併し貧者と富者との間に何等の交渉の無いのは國家の禍である。貧者と富者との握手こそ實に平和の大基礎である。私はこの文を見てつく〴〵斯う思ふのである。

夕立の後

藤原定家

夕立の雲間の日影晴れそめて山のこなたを渡る白鷺

所謂新古今時代を代表する歌人は實に定家である。定家は才の人である。技巧の人である。私は才や技巧は嫌ひだ、併し才や技巧を排斥してそして味の無い歌を作つて得々たる人も嫌ひだ。技巧に腐心せずして自ら感を吐くことが出來るやうになつて、そしていつまでも技巧の末に拘泥してゐる事を小なりと悟ることは宜しい。宜しいどころでは無い、さう無くてはならぬ筈である。さうなつた眼から見ると、定家は小とも云へるであらう。併し技巧も亦一味ではあるこの歌は玉葉集に出てゐる。「雲間の日影」といつて、夕立の晴れかゝつた樣を思はせ、「晴れそめて」と續けて段々晴れて行く樣を思はせる。この僅の間に所謂時間がある。そんな風に細かく小きざみに解するは誤だと云説があるかも知れぬが、惡い誤では無からう。それから「山のこなた」の「こなた」は實に才の極である。老練の技巧家で無くては思ひつかぬ言葉である。「白鷺」を大切に最後に置いた。畫龍點睛とはこの事である。印象のまことに明かな歌である。これは定家の眼前で見た景か或は想像の景かといふに、私は後者と思ふ。

花と女

森川許六

百合の花は數品多し。笹百合、博多百合、鬼百合、色は異なれども元來一種にして、生得いやしき花なり。たとへば輿車に乘れる位なければ、抱へ帶强くからげあげ、上づりに脛高く歩み出でたる女に似たり。姫百合は十二三ばかりなる娘の後に帶うつくしく結びたるが如し。

紫陽花の花は、色白に肥え太りたるが、近く寄りて見れば、白いものゝあとのすき間も無くて、興さめて止みぬ。

蓮はうつくしき所少し。たとへば上手の繪にかける天人の顏にひとし。どこやら佛めきて、心こそおかるれ。

朝顏の盛すくなきは、よき女の常は病がちに打惱み、土用八專のかはる〳〵隙

なきに打臥し、一月の日數も廿日は頭からげ引込みたるが、たま〳〵空晴れきり朝日さし出でたるに、心地よげに打粧ひ、衣裝などあらためて、ほのめき出でたるには似たり。

これは俳文集風俗文選の中にある百花賦の一節である。全篇四季の花をそれそれ女に比喩したものである。何は何のやうだ、と云比喩で無く、何は何がどうしたやうだ、と云やうに、比べた女の行動が極めて具體的に描いてある。一體比喩はいくつも重なると無理が出るものであるが、この文には少しもそれが無い。百合のところに帶の締め具合が出てゐる。この帶でその女の鮮かになつてる所に御注意。紫陽花のたとへは如何にも面白いでは無いか。一寸斯うした女の風情が確にある。蓮を天人に譬へたのは平凡たるを免れざりしが、これはこの外に譬へやうが先づ無いであらう。この中では朝顏の比喩が最も面白く感せられる。朝顏はパッと美しい花である。併し濕りがある、沈みがある、弱みがある。美しいと思ふまに、疎ましい樣になつて仕舞ふ。その咲いてる間の美しさはまことに病婦の化粧した樣である。たゞ病婦とのみでは言足らぬ。これだけの描寫で始めて朝顏の特色が遺憾なく現はされるのである。この病婦の描寫の中一文字と雖も、朝顏の趣致を寫すに不必要な字は無い。名文なる哉。

紫蘭

風鈴

風鈴の鳴らむとしては止みにけり

面白いところを見付けたものである。風の無い日で風鈴はチリンとも云はぬ。時々少うし風が來る、鳴るかなと思つてると、舌は搖れるやうだが、鈴の裏まで届かないで鎭まつて仕舞ふ。斯う云機微を捕へたのである。「しては」の「は」文字で、この事が何度も繰反されることも明に示して居る。俳句では斯う云やうに一字でも非常に働きをなすものである。

露西亞の夏の朝

徳富蘆花

馬車は西北を指して徐に熟せる麥圃の畔を行く。矢車草千鳥草など麥に交り咲きたり。靜かなる哉露西亞の夏の朝。日は早や高けれどもきらめかで睡げに、遠き林には霧迷ひ、野づらは一面白き露の海。何處にか鷄鳴きぬ。人は見えず。身は半ば夢心地に馬車に搖られ行く。麥の穗末に青塗の寺を見つゝ、停車場より一時間ばかりにして一の小村に出づ。此はヤスヤナポリヤナの村なり。藁葺、板葺の矮屋兩側に並び、幅濶き中間の道は草生ひたり。犬吠え、跳足の子供ぽんやりと立ちて見る。馬車は村の立つ低き丘を下りて、西へ綠青色に塗られし圓錐形の屋根ある番小屋付の門を入る。

明治三十九年の七月の一日日本の文士德富蘆花は露の偉人トルストイ翁を訪うた。趣味ある事實であつた。これは蘆花がゼキノの停車場より杜翁の家に向ふ途上の景色を寫したものである。蘆花の小說の或者は甚しく世に歡迎された。しかし私はその或者の如きは少しも趣味を感ぜぬ。蘆花の筆に感ずるは却つて斯るものにある。併し蘆花の人格は潔い。小說となると多少の匠氣の爲に人格が蔽はれるので、斯う云ものに人格の流露を遺憾なく見得る爲であらうか。この文を見よ、原の早朝の其地の景色、宛然讀む者の目の前に繪の如く展げられる。この文に注意すべきは語句の不揃ひの所である。「遠き林には霧迷ひ」と來ると、大抵の人は、「野づらには露ぞきらめく」などゝ同じやうな長さ及び調子で書くところであるのを、「野づらは一面白き露の海」と書いてある。そして其次に「何處にか鷄鳴きぬ、」「人は見えず」と斷れ〳〵に書下してある。又「犬吠え」といひ、「跳足の子供はぽんやりと立ちて見る」と續ける。强ひて對句やうのものを作り、調を整へるのは初心のことである。寧ろ邪道である。見るまゝに、字句の長短等を顧みず、書いたものを見ると、如何にも其書かむとする所が其儘顯はれて居る。この文の如きは目前に見た人にして始めて書けると云文である。實際の人間を知らないでも、この肖像畫は似てるか似て居ないか、

解るものである。生命を寫してあるものは、其の生命が見る者の胸に響く。この響きの有無によつてわかるのである。私はもとよりヤスヤナポリヤナのあたりの景色を知らぬ。しかしこの文は遺憾なく寫してあると信ずる。そして原の朝の爽かな濕つた氣持がよく現はれてゐる。前出の「塵」は反抗の氣滿ち、時は夕方にて、武器作る建物の側を描き、此れは靜なる朝の村、平和溫情の偉人の家の近くを寫したり。

夏の朝

蘇峰

晨朝の愛すべきは夏晨より愛すべきは無し。

曉風面を吹いて、寒ならず、冷ならず、また溫ならず、熱ならず。

牽牛花は天上の星よりも微に、芙蓉は殘月よりも淡し。

朝眠を貪る人は到底此の中の消息を了する能はざる也。

あまり宜い文では無い、寧ろ惡文である。私は唯この趣を買つたのである。爽かな夏の朝、風が吹いて居る、牽牛花が咲いてゐる、芙蓉が咲いてる、月殘り星殘る、この趣は如何にも佳い心持を與へる。書き方は厭であるが、趣は佳い。夏の朝は著く濕つてゐる、晝間照り通し、夜の閨に暑さを苦しむ際に於て、この濕つた落着いた光景が誠に潔く見えるのである。清少納言は朝を春に取つて、夏に夕暮を取つた。人の好き〳〵である。ともに眼の着け方に趣味がある。一體朝はいつの季でも潔い。寒さ嚴しき冬と雖、なほ早起して見ると、その寒さを疎むよりも、その潔きを愛する情の方が勝つ。自然がまだ人間に汚されざる趣は朝に於て始めて見るべし、人造物が自然物の一つとして現はるゝ趣は朝に於て始めて見るべし、されば朝の潔さは田園に於て見得るのみにあらず、市井に於ても見得る。朝起は一生の得と云訓は、單に働く時間が人より多く得られるが故のみでは無い。その潔きに感じて、我が心潔く高く、この心持は確に終日心の土臺に殘つて、事を處理するに當つて、邪な或は誤つたことをするこ

とが少い。この邊の消息をこの訓は自ら傳へて居る。

朝顔　史邦

朝顔や夜は明けきりし空の色

蘇峰の文でこの句を思ひ出した。これは夏の晨朝の感じをよく顯はして居る。朝顔は俳句では秋の季題になつて居る、これは今は打破しても宜い。この史邦の頃はまだ朝顔は秋のみのものであつたかも知れぬが、この趣、今夏の朝の感ととしても味ひ得られる。季の論はさておく、この句の妙味は、日の未だ出ずして、しかも空一面に晝の光が漲り渡つた景を叙したところにある。勿論この句は日未だ出でずなどゝ斷つては無い。「夜は明けきりし空の色」との表白で十分にそれが解せられるのである。「日無き空の涼しさ」この短言以てこの句を說明すべし。

夜の雲　露伴

夏より秋にかけての夜、美しさいふばかり無き雲を見ることあり。都會の人多くは心つかぬなるべし。舟に乘りて灘を行く折、天黑く水黑くして、月星の光りも洩れず、舷を打つ浪のみ靑白く騷立ちて、心細く覺ゆる沖中に、夜は丑三つと思はるゝ頃、艙上に獨り立つて、海風の面を吹くがまゝ、衣袂濕りて重きをも問はず、寢られぬ旅の情を遣らんと詩など吟ずる時、稻妻忽として起りて、水天一齊に凄じき色に明るくなり、千疊萬疊の濤の頭は白銀の簪したる如く輝き立つかと見れば、怪しき岩の如く獸の如く山の如く鬼の如く空に峙ち蟠まり居し雲の皆黃金色の笹緣着けて、いと嚴かに人の眼を驚したる云はん方無く美し。

莊嚴な物凄しいそして絢爛な趣をありゝと寫した文である。海上でなくてはこの趣は見られぬ、深夜で無くてはこの趣は見られぬ、しかも見る人旅人にして始めてこの趣を斯くまで感じ得るのである。文の上半は暗く淋しき情を寫してゐる。月を描く時の隈の用をなしてゐる。旅は淋しさが命である、心合ひの人

々打連れて洒落をいひながらの旅は、我と云ものを平常の人情で包んだ儘運搬、するだけのことであるから、眞の旅情はわからぬ。旅は獨り旅で無くてはならぬ。今まで包まれてた人情の蔽ひから脱け出でゝ、身一つで動き出す。自然と人間も皆我と社會的習慣的の親しみは無い。我の從者、我が命に從ふ者とては何もない。總べての者から離れて純客觀に之を觀る。又總べての者に我は隨ひつゝ歩む。こゝに淋しみがある、誇らしげなる所もある、淋しいとのみでは物足りぬ。獨旅の悲しみの中には、實に眞に對したる悲しみ、人生の底にある悲しみ、これがあるのである。この悲しみは、暗き灘、青白き浪に煽られてひし〳〵と我が胸を衝く。この時忽然として大光あり、水天閃輝す。何といふ莊なる觀物であらう。この時濤の頭が白銀の簪したやうに見えるとは、未だ見ぬ人には想像は困難であらう。これ濤頭より迸る飛沫が、その迸つたる刹那に電光に照されて銀簪の如く見えるのである。下にこの偉觀あり、怪雲の今までは暗に見え分かざりし形が瞬目の間に歴々と見え、皆笹縁輝いて見えたる其樣。上にこの偉觀あり。この間に我立つて、唯驚き仰ぎ、旅愁全く消えて、心空しきに似たり。この心持をよくも寫してある。この偉觀は實に晩夏初秋の節に現はれる。

立秋

秋、今立つ。

芙蓉咲き、法師蟬鳴く、赫々として日熱するも、秋思已に天地に入りぬ。」

立秋は八月八九日頃である。今年は九日午前一時四十五分である。暑いことは暑い盛りである。秋と云つても名のみであるやうに思はれる。しかし流石に暦の示す所は爭はれぬ。暑熱中自ら秋の氣を感ずる。こゝに限り無き趣があるのである。私は秋が好きである、一年中最も秋季を愛する。汝は何の爲に此世に生きて居ると問ふ人があるならば、私は、秋を味はむが爲にと躊躇なく答へる

であらう。立秋、斯く記すのみにて私は蘇するが如き感がある。秋を愛する甚しきが爲に、秋の微なるもの細なるものを閑却すること無くこれに觸れ得る。芙蓉の色、法師蟬の聲、それにも秋の匂韻はあらう、しかしこれのみでは無い。立秋の秋氣は目に見えず耳に響かざる所にあり〳〵と動いて居ると私は感ずる、そして喜びに耐へぬこと年毎に同じである。

風の音　敏行

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

有名な歌である。所謂人口に膾炙する歌である。幼時から屢これを聞いた。一向平凡な歌と思つてた。秋と云ふものが目には見えぬが風の音に秋を知ると云、例の理窟を先に情を後にした歌と思つてた。一昨年の立秋の午後、晝寢から醒めて暫くぼかんと庭を見てゐた。ふと「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」斯う高誦してみた。この歌が身に泌みる如く感じた驚いて立つて更に歌つた「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」名歌であると始めて思つた。何の故にこれが名歌かと云ことを十分爰に説明し得ざるを恨む。諸君が自ら立秋の日さなくとも初秋の頃試みにこれを誦し試み給へ、必ず感ぜられるであらう。其の一端の趣を云へば、滿目たゞ青樹黄土夏の景は少くも姿を改めぬ。この夏の景を蔽ふやうに風が吹き通る其の風のあわたゞしき音、其の音を聞いて秋なるものを鋭く感得した、そこを其儘歌にしたのである。この「驚く」と云語は實に千鈞の重きをなして居る、「目にはさやかに見えねども」の邊に物を求むる心の闇さが見え、終にこの驚字に、幻燈の眼鏡の度が合つた如くシャンとした。製らずして自ら成れるものにして、始めて斯くの如き趣が存し得るのである。

今夜の市　建樹

夕日涼しくなれる道を百合女郎花など車に載せて行くは、今夜の市に急ぐなら

む。まづ價よく賣られて、やんごとなき前栽に光を放つもあるべし。寵衰へてかれ〴〵ながら籬のもとに投げやらるゝ行末もあるべし。あるは夜更け人去り行く燈火のかげに獨り殘りて、世を恨めしげなるも、または低き直にねぎられたる果は、一夜の寵をも全うせぬなど、さま〴〵なるべし。おのれ花ならばいづれも願はじ。

夏の末秋の初あたり緣日に赴く花屋を見ての感想である。優しくすら〳〵と書流してあるが、恐しく强い、人を叱りつける如き文である。車上の花のさまさまの運命を想像して書き列ねた。「さま〴〵なるべし」といひ放つたのみで文を終つたならば、實に下さらない、書かいでも解つてる、文である。寧ろ文と云價も無いかも知れん。然るに「おのれ花ならばいづれも願はじ」この一句、大喝、雷奔の如しとは此の事である。この結局を讀んで人は肅然として容を改め、自ら省みて冷汗淋漓たらむ。花のさま〴〵の運命を書いた中には「價よく賣られてやんごとなき前栽に光を放つもあるべし」と幸運の花をも描いてあつた。作者が願はずと云つた中にはこの幸運をも含んで居る。否々、この幸運を誠に强く指してゐる。作者の斯く云ふ所以如何。安く賣られ、輕んぜらるゝこと、もとより作者の願ふ所にあらず、而して貴人に高く買はれ重んぜらるゝこと、これ亦作者は願はずと云其故如何。抑賣らるゝと云と、人に保護さるゝと云と、是作者の願はざる所である。山に匂ふべき者は山に匂ひ、野に香るべき者は野に香る。是れ花の自然である。斯くて大天の下、長風の間に自然の生を全うすること花としての願であるべきである。我斯く生きるべし、我斯く事業を成すべし、この志ありながら、他人に雇はれ他人に使はれ、而して他人に重寶がられ長く雇はれ使はれ優待さるゝ事を幸運と思うて、さきの志は忘れ、さて一生を終つて了ふ。斯う云生活の誤れるを作者は大喝したのである。人はこの生活の誤れるを悟り本然の志を達する道を進むべきである。人の妻たる者、人の妻た

る者は、其の良人をしてこの本然の道を進ましむるに献身的に努力すべきである。

秋の聲

透谷

我庵もまた秋の光景には洩れざりけり。咽鳴き破るばかりに鶲の聲々、高き梢に聞ゆるに、窓開きて、そこか、こゝかと打見れば、そこにもあらず、こゝにもあらず。窓を閉ぢて書を披けば、一層高く聞ゆめり。鳥の聲ぞと聞けば鳥の聲なり。秋の聲ぞと聞けば、面白き讀書の類にあらず。

北村透谷は涙多き人であつた。多感の詩人であつた。この文章推敲したるものには非ず、唯感ずる儘を書き流したゞけのものであるけれども、多感の所がよく、見えて居る。鶲が鳴く、彼の聲は鋭い。鳴き聲に驚いて探すと無い。あきらめて書見を始めると又鳴く、斯う書いて來て、あれは鳥の聲か將た秋の聲かと疑ふ。こゝで非常に趣味が擴大された。「鳥の聲ぞと聞けば鳥の聲なり」と書いて、其次に「秋の聲ぞと聞けば」と書いて、無論「秋の聲なり」と來さうな所である。それを筆を轉じて、「面白き讀書の類にあらず」と結んだのは面白い。自然に生命ありと感ずる。この感が起る時、森羅萬象は各箇性を備へて躍如として我に來る。自然に親み、自然と語る心持は、迚も讀書から得られる心持と比較にならぬ。こゝに「讀書の類にあらず」と記したのは決して文飾では無いのである。

武藏野

獨歩

九月七日――「昨日も今日も南風強く吹き、雲を送りつ雲を拂ひつ、雨降りみ降らずみ。日光雲間を洩るゝ時林影一時に惶めく――」、これが今の武藏野の秋の初である。林はまだ夏の綠の其儘でありながら、空模樣が夏と全く變つて來て、雨雲の南風に連れて武藏野の空低く、頻りに雨を送る其晴間には、日の光水氣を帶びて、彼方の林に落ち此方の森に輝く。

九月十九日―「朝、空曇り風死す、冷霧寒露、蟲聲しげし、天地の心なほ目さめぬが如し」、同二十一日―「秋天拭ふが如し、木葉火の如くかゞやく」。

獨歩の特色は、眞面目に精細に自然と相對した所にある。人間をも自然と相離さず、自然中の一物として、この自己にも自然の生命が呼吸する、と斯う感じて居た所にある。彼が武藏野を觀察して印象を記した「武藏野」の一篇は其の自然憧憬の初めの部であつた。これは其の篇の一節である。夏と秋との混雜する頃の野の變幻を寫した。彼の文には少しも因襲的の文字が無い。「日光雲間を洩るゝ時林影一時に煌めく」、「日の光水氣を帶びて彼方の林に落ち此方の杜に輝く」、「木葉火の如くかゞやく」。斯る叙影を古き和漢の文章に採つたら、或は當嵌まる句があるであらう。併し其等の句を其儘用ひるか、或は其等を少し書きかへなどして用ひたら、如何にそれが名文句でもこれだけの強い印象を與へることは出來ぬ。此の目で見、此の心で感じた其儘を筆にのぼす、文章の妙はこゝに產れるのである。所謂和文家輩が感じを後にして古書の智識を羅列して事を敍したるものゝ如きは全く何の感をも讀者に起さしめぬ。

木犀　子規

木犀や人は寢ねたる庭の月

木犀の香を恐ろしく嫌ふ人がある。私はこれを好む。必ずしも其の香りそのものを好むのみで無く、其の香る折の趣を愛する、この句は、月のよさに、夜更けてから庭に出て歩いて見る。もう四隣閑寂として居る。そして木犀が空中に色を飛ばすが如く濃く香り渡つて居る、と云趣である。しつとりとした句である。木犀の匂ふ頃の日の光、夜の氣、私は一年中最も好むところのものである。

名月　嵐雪

名月や柳の枝を空へ吹く

晝の如き中秋の月夜、冷たい風が渡つて、柳の枝が空の方に吹き上げられてる

景色である。細々として、清澄な、そして哀愁の瀰漫した句である。私は古今名月の句中屈指三四中の一つであると思ふ。更科日記に、姉妹が縁に月を見てゐる處が書いてある。世は靜まりかへつてゐる、姉が凝然と月を仰いでゐながら、今我等が行方も知らずこの大空高く飛んで行つたらどんな心持がするであらう、と云つた。妹は目を見張つて恐れた。姉は可哀想なことをしたと思つて他事に語り紛らした、と云とが書いてある。いつ讀んでも心に響く所である。更科日記中の壓卷の所だと私は思ふ。「名月や柳の枝を空へ吹く」この句より得らるゝ感じとこの更科の一節から得られる感じと確に似た所があると私は思ふ。

月と雲

鹿津部眞顏

うす雲も月の前をば驅けかねてそつと後ろを通ふやうなり

總じていへば狂歌は實に詰らぬものだ。本歌のモヂリ、それが十中の八九である。これが實に口惜しい次第である。獨創と云ものが無い、これが陋劣である。

この狂歌の中にあつて、たまに偶然のやうに獨創的の色を帶んだものがある。蜀山、眞顏、其他一二の人の作にのみ此の事があるのである。これはうすい雲が月の前を通るところを寫したものである。月の前を通るのは不都合である。無禮であると遠慮して、月の所へ來ると、月の後ろをまはつて行くやうに見えるのである。雲が薄いと、月の前を通る時に月の光の強さに、雲の其の部が透けて見えなくて丁度後ろを通るやうに見える。全く實際の景を狂歌風に有情的に云ひあらはしたのである。この實際の描寫と云ふのが狂歌中には多くは見られないことである。

樂

鷗外

樂しとは拂子振る間を近づかぬ蠅を忘るゝ思ひならまし

人世の樂しみ、まことに是れ惑ひとも云へる。愉快だと云つてる其の刹那に、苦しみは自分に近づきつゝあるのだ。時間が少し經過する、もう樂しみは無い、

苦しみばかりになる。この現象を巧に比喩したものである。拂子は蠅をよける爲に振るものである。日本では僧の一つの飾り道具のやうになつてるが支那では今もこの實用方面に使はれてゐる。この事は日清戰爭日露戰爭の際に出征の人等が目擊したところである。この歌は出征中の作である。拂子を自ら用ふるにつけて偶發した感想である。

冷汗

是ればかり着て來やるのと里の母　（川柳）

川柳である。嫁が實家に行く、何時も同じ着物を着て行くから、母が、餘り暮しが樂でも無さゝうだと心配して、それを露骨にも聞けず、まあ斯う云つて見たのである。

俗曲

新内でも清元でも、上手の歌ふのを聽いてゐると、何だか斯う國民の精粹とでもいふやうな物が髣髴として、意氣な聲や微妙な節まはしの上に現はれて、吾が心の底に潜む何かに觸れて、何かゞ思ひ出されて、何とも言へぬ懷しい心持になる。

四迷

四迷が新内や清元に聞惚れたことがあるとは一寸意外のことのやうに思はれるが左うで無い。よく寄席などへも出かけて、斯う云德川時代の平民趣味をも味はつて居た。如何にも俗曲を上手に歌ふのを聞くと斯う云感が起る。「何かに觸れて、何かゞ思ひ出されて」と云ところ殊によく其感を云盡して居る。

我が望み

華族女學校を卒業して親の手から夫の手に移され兒を產んで、愛國婦人會の名譽會員になつてゐる女は、自分の振向かうとする人では無い。自分は汚名を世に謳はれた不義の娘と腕を組でみたい。嫌はれたあげ句に無理心中して生き殘つた男と酒が飲みたい。晴れた春の日の日比谷公園に行く勿れ。雨の降る日に、泥濘の

本所を散歩しやう。

思ふ儘を能く放言した文章である。荷風は唯に秩序のみあつて實質無き物を疎んずるのである。如何に秩序無く形式無くとも、實質あり活きて居り動いて居る物を尊むと云のである。汚名を世に謳はれた不義の娘、あんなものと所謂賢き方は排斥する。しかし物のうはべを見て、簡單にして盡さゞる道德律にのみ據つて、輕々しく物を判斷する勿れ。あゝ春の日の日比谷公園、泥濘の本所、このどちらに味があるか。物の幅をのみ見て、物の深みを見ることの出來ぬ人はあはれなる人である。

俳諧文反古

帷子の質受の工面中に土用が濟む樣な貧乏人の悲しさ此頃になりて漸く當地へ參り候御一笑

八月廿四日　日光にて　亭雲生

柿田洞葉樣

此文を考見るに、亭雲といふ號から、又文意から文士の文なると著し。八月も廿日過ぎてからやつと避暑とは隨分おくれたり。おくれてもせざるに增さる。亭雲實は可なりの裕福かも知れず。突然と帷子の質受云々と書下したるところ面白し。

君は僕を忘れたか、今日は土曜日で君の休みの日だから、行つて見やうと思つたがよした、僕ばかり君の家に行くやうで口惜しいからだ、たまには端書でもくれないか、忙しいのはお互ひだ、何も君ばかり忙がしやの專賣人、忙がしの官營をやるわけは無い、今日古い日記を見たら、君が「時々こんな事で喧嘩ごつこをしやうでは無いか獨歩が居なくなつて淋しいから」といふのがあつた、敢て喧嘩を吹つかける、

八月廿八日　野次二聲

知嘉寒泉様

此文を考見るに、寒泉と二聲とは餘程の親友と見えたり。寒泉は忙しい〳〵を口癖に云つてる人と見ゆ。三宅雪嶺曰く多忙々々と云ふ奴は碌な奴にあらずと。寒泉も或は碌な奴で無いかも知れず。それをからかつた二聲の言に機智横生せり。兩人とも獨歩崇拜者と見えたり。

昨日着鶴明日より出校

一夜にして滿目の光景一新す

滿山の雪、野の百花、天地寂として聲無し、文明より未開に、自由より束縛に入り、平凡の一市民と化し候

四月廿八日　東場啓四郎

松本丈夫様

此文を考見るに、東場と云人東京を去りて北方の國の鶴と云ふ字の附く所の學校の教師に赴任したるものなるべし。着きて直に東京の友人なる松本に寄せたる手紙なるべし。四月といふに滿山の雪といふ、其の境の僻せるも想はる。それに對するに野の百花といふ。美しさ見ゆる心地す。天地寂として聲無しの一句まことに東京の友の胸底に響きたるなるべし。

一昨夜は本意なき御別れを致し候彼の夜の小生が呑さざる樣をば君も怪しとこそ見玉ひけめ、正しくも彼の夜の酒は苦く三味線は悲しく候ひし君も或は記憶し玉ふべし、澤井へ參りて未だ酒肴の參らざる内君と櫛子に靠りて朧夜の物思はしむる天のたたずまひを打見やりつゝ小生は何とは知らず君が行末を考へ居り候ひし折も折、君が、小生に交りてより少なからぬ新趣味を得取しぬとの言、そは一場の世辭には過ぎざるべけれど小生は其時實に考へ候、吁新趣味よ、趣味とは何ぞ、我等が趣味なるものは餘りに不羈なり餘りに超絶的なり、趣味の爲に我等は

道義を破りて敢て悔いざるやうの暴なきか、喩はゞ罪悪を見て其を憎むは俗人の見なり、其を憫むは詩人の同情なり而して一歩進んで罪悪に就いて人生の趣味を感ずる、是少なくとも詩人の同情以外詩に作らんが爲――己が職の材とせんが爲の利己の情なり、況んや我等自ら罪悪を犯して以て詩的趣味を得取せんとす、其は我等自身の一種の慾望に阿ねるもの、加かも我等は趣味の爲なり新知識を得んが爲に敢てす、といふ自ら欺く者にあらざるなきか神は我等がぬす人を知らんが爲に盗を試むるを許すべきや、君は酒を飲み女と戯れて而して殊更に其の賤しき境より一歩退き己がなしつゝある行ひを自ら評して如何に野村の趣味あるよと叫ぶ、責むべきにあらずや、心より荒飲漂蕩をなして其を價値あるものと自信しつゝなすものは其愚嗤ふべしと雖其罪は尤むべきにあらず、我等は我が行ひの賤しきを知り浅ましきを知り愚なるを知りつゝ仍且つ其れをなして而して自ら辨護して曰く我等は眞面目にあらず唯試むるのみ酒落なり戯れなり趣味を弄ぶなりと、

憎むべきにあらずや、君は新しき趣味を得たるを喜ぶ吁酩酒店や、遊女屋や、賣色や、黒人や、遊びや、洒落や、君が既往の純潔、眞摯、素朴、濃情、多感、其れ等の美德と交換して惜からざる程の價値ありや、君よ小生は既に人間の美しきものゝ總てを失ひたる人なり、只己が既往を思ひて君が急阪に一歩を踏懸けつゝあるを見てそゞろに悚然たるものなり、實は澤井の歸りビーヤホールが起きてゐたならば此の感を君に語らんと思ひしなれど寢てゐて果さず、今獨酌の醉は深く感想胸に餘つて筆思ふに任かせず乞ふ言外の意を汲み玉へ。

余は再言す、余は人間の美しきものゝ總てを失ひたるものなり、余は君の如き美しき人に近づくを心竊に恥づ、余は病膏肓に入れる身なり、濟度し難き身なり今宵とても余は財政と衛生との爲に獨酌を廢せんと自ら定めつゝヤハリ大杯を傾けつゝあり、此の荒飲の者を見よ憫め、余は病膏肓に入れる身なり、酒を飲まずば睡らず酒を飲まずば筆持つ手の戰慄して字を書く能はず而して醫師はいふ汝晩

酌を禁ぜずば短命ならん〳〵、余が今此を草する片手に握れる盃は將さに余が生を削るの鑿なり加かも之を唇にせざれば余は現在の生を繼續する能はず悲慘ならずや。

此頃も申上候が君アートに今少し苦心し玉へ會つて申上げたいと思へど會へば流石に申し難く余は實に君のアートの粗なるを惜む。

君は余が放膽を知り余が細心を知る、されど余が煩悶を知らざるべし半宵孤燈に對して盃を銜む、呑めども〳〵慘として醉をなさず、無限の苦痛、悔恨、胸を突いてそゞろに自殺を思ふ、世の嘖々たる徒は此際妻子の事を思うて分別をしなほすされど余には妻子の力はゼロなり一度胸に醫然として苦悶の生ずるや、余には妻子肉身の愛とか情とかいふもの無し、唯強大なる理性を強ひて呼び起して、辛くも情の盲動を制す、情を以て情を制し得らるゝ人は幸ひなる哉。

四月三十日　德地楓曉

野村溪枝樣

此文を考見るに溪枝は坊ちやんにて文學に志せる者、友なる楓曉は文壇知名の人なるべく、楓曉溪枝を花柳に誘ひ、其後溪枝は色を知り酒を知りたるなるべし。今楓曉心の底の心を吐露して溪枝を戒む、一字一涙、何人も此を讀みて泣くべし。溪枝はよき友を有ちたりと云ふべし。

病氣も全快されたさうだ、何よりの事だ、病氣程つまらぬものはない。僕は眼が充血して氣のせいか頭も痛い樣ぢや、僞れる生活を送つて居るは實に苦しいものである、心から笑ふ樣な話をした事一度も無い、七月迄に多少ためて一杯飲まねばならぬ。僕は今アアウストの論を書いて居る適當な借家が無い爲甥の處に居るいづれ今月末か來月中旬までには七圓の處で畠もついて間數の八つか九つある大家を借りる積りだ、大舉して來給へ、場合によつては仕事を持つて一二ヶ月滯在し給へ、今は鯛の盛りだ、二尺位の大いのが七十錢とは驚くの外無い、湯代が

一錢五厘、家賃も半分、凡てが半分である、だから人間も半人前しか無い、いや多くは椅子に腰かけて眠つて居るものが多い、明治の今日に呑氣な天地もあるものだ。二三日此の方急に夏が來た樣になつた、月山と鳥海は半以上白雪である。櫻の遲いのがまだ見える、後の工場で機織の聲が聞ゆる外何も音しない。道路に面した座敷で此の手紙を書いて居る間通つたものは一人しかない。飴賣の聲が聞えぬのは何となく物足りない。

五月三十日　東場啓四郎

松本丈夫樣

此文を考見るに、さきの「天地寂として聲無し」の次におくりたる手紙なるべし。土地の寂寞な樣よく見えたり。文の最も妙なるは、末節この手紙を書く間に通る人一人のみと記したる所なり。一人も無かりしにあらで一人のみありしは嬉し。一人も無かりしよりは却て大に寂を示すに足る。さてふと飴屋の笛を戀うたる、自らの俳意ならずや。

甲信越をかけめぐりてしばし信州安代の湯に足を洗ふ、人愚にして頗るわが意を得たり、桂子一たびは來れ小艾の喜ぶべきものなしと雖、酒の以て歡を買ふに足るものあり、桂子一たびは來れ。

囀や三郎兵衞が背戸の山
瀧の上は山吹で候桃で候

五月十日　嘉固斗庵

布上桂溫樣

此文を考見るに、嘉固斗庵その奉職せる音樂學校の學生を連れて演奏旅行でもしたるさきから送りたるものなるべし。人愚にして我意を得との言は後の句と相助けて、よく其地の趣を盡せり。桂子一たびは來れと繰反しいひたる所、支考の招魂賦の文理にも似て尤もおもしろし。

明日より間借りを致すべき宿命と相成申、就ては何分宜敷御願申上候、杉風呑獅のなき世はまことに困つたものに候と先生へ御傳願上候、遅くならぬうち御免かふむり候、これより龍宮へまゐるべく候、夜が短く候へばこれにて失禮致候

うたか

奥様御許

此文を考見るにといひたけれどどうも考へること出來ず、さて〳〵わからぬ手紙なり。明日より間借りをするといへば家を追はれたるなどの窮境に入りたるものなるべし。杉風呑獅なき世をうらむは、うたかと云人及びこゝに所謂先生なるものともに俳道に心を寄するものか。さて遅くならぬうち御免かふむるとは何處を御免かふむるか、何を御免かふむるか、或は不在の所へ來て待つて居て待ちきれずして書置したるものか。これより龍宮へまゐるといひ、夜が短しといふ。さては窮境に耐へかね入水を思ひ立ちたるか、それでは本當の書置。と思へば前の間借りを明日からすると云ことに合はず。亂心の體も見えず。さて〳〵わからぬ手紙なり。

目下博覽會開會中にて小生同様赤毛布の碧眼胡人雲集致居候、千古の風雨に曝されたる石柱石殿は千古の偉人佳人の風貌を想起致させ候。アルプス山麓は櫻花爛漫にて、當地には藤花の盛りに御座候、御健康を奉祝候

四月二十五日　ローマにて　永

佐々木健男様

此文を考見るに永と云人歐洲漫遊の途におくりたるものなるべし。石柱石殿はことふりたり、アルプス山麓の櫻とローマの藤は新しく鮮かなり、あゝローマの藤、ローマの藤、成程藤はローマに咲くべき花なり。天の意匠を思ふこと切なり。

新年かたの如くおめでたく存申候、珍味を得れば先づ君を思ふ、君が尤も珍物

すきにして僕が尤も味感不十分なるを以て也、韓國の兄五年ぶりにて歸省す、おみやげの朝鮮の香の物一半を君に分つ、此香の物の瓶の多きが即ち富の程度を說明するものとしてある由也、此の香のものゝ異臭はうたゝ當時平壤までの難旅行を思はしめ、今昔の感に耐へず候、香の物はホンの少置也物語は多量也御一笑を乞ふ、令閨に面せざる事久しまじめになつてよろしくと云ふ、

一月三日　二聲

曇大兄

此文を考見るに曇は珍物食ひと見えたり。新年のはつ便りに朝鮮の香の物は振ひたり。眞名井も嘗て味ひたるが、はく菜を唐辛子と酢と鹽とに永く漬けたるものらしく、頗る趣ある味あるものなりし。

矚目悲愁に耐へず。

我は我生を如何せん、樂む事少くして傷む事多き我生を悲む事甚し、樂まんが爲に（悲まざらんが爲に）生れたりとするは甚だ我儘なるべけれども、ともすれば悲想に閉されつゝ我が生涯を送るは愚なり弱し、

我が悲想を如何にせん、

君を思うて泣かんと欲す、我は今我が悲想を訴ふ可く特斗の已に亡きを知り、我諸友のうちに特斗を求めたり、而して君を得たり、君を思うて泣かんとす、君は今貧しきや忙がしきや得意なりや冷かなりや、一つも知らず、只我が君を思ふは我の印象せる亭門なり、我が印象せる君を思うて泣かんとす、我が印象せる君は即ち或は我なるべし、人間は勝手氣儘なるもの哉、

君を思うて泣かんとす、君を見たきかな、我は今平瀉にあり、平瀉にて醉ひつゝあり、平瀉は小灣なり、鰹船多く集り、漁夫多く晴空の下に相呼び罵る、晴空悲し、漁夫の聲悲し我は錢三十萬金なきを悲む、我は我情を恋にして、我が快樂に殉じ得ざる事を悲む、

我は凡俗のチャンピオンとなりて快樂に恣なる能はざるを悲しむ、そして年老い快谷まりて、一發のピストルの下にアルコホル骨を碎き美人臭を帶びつゝ死し得ざる事を悲む、

藝術は好き道樂也、而も是に附隨せるバチルスあり、曰く細心、曰く向上心、曰く末技、曰く嫉妬、曰く勉强、曰く排他、曰く自尊、曰く何、曰く何、家庭何ぞ煩はしきや、世間何ぞ面倒なるや、職業何ぞ糞忌々敷や、あゝ酒好く、女好し、それよりも我情感、自殺したくも自殺し得ざる近代人を咀ふ、近代思想よ、何ぞ我を苦むる、自然主義よ、何ぞ我が夢を破る、近代思想の壓迫、自然主義の威嚇、君を思うて泣かんとす、君を思うて泣かんとす、何等のベラボーぞ、世間は我は、

センチメンタルと云ふは何ぞや、

此のほか色々あり、我が鉛筆我が感情とそむく、文章は思想と壁隣りなる哉、晴空悲し、漁夫の聲悲し、亭門君、

君を思うて泣かんと、只泣かんとするのみ、涙一滴も出でず、只胸中に渦卷の如きものあり

八月二日　比英

亭門兄

此文を考見るに比英は藝術家なるが何か失意のことありて黑雲の如き悲愁に閉されたるとおぼし、泣いて親友に訴ふ。斯る情感これを妻に訴ふべからず親に訴ふべからず師に訴ふべからず唯々友の中の一人の友に訴ふべきもの。

鬱勃の氣、激越の調、字々火の涙とも譬ふべきもの、そも〳〵文章とは斯るものなり其人にして始めて成し得べきが眞の文章なり。甲も成し得べく乙も成し得べきは僞の虛の文章のみ。

俳話小品

しろ椿

終

著作權所有

明治四十五年六月廿八日印刷
明治四十五年七月一日發行

（俳話小品　しろ椿）
定價金六拾錢

著者　沼波武夫
發行者　大橋新太郎　東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷者　水谷景長　東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地
發行所　博文館　東京市日本橋區本町三丁目　振替貯金口座東京二四〇番

内藤鳴雪君著

◎鳴雪俳話（四版）

全一冊四六判美本　紙數二百五十二頁　正價金貳拾八錢　郵稅金六錢

暑さと涼しさ　俳句と散文　名月の句　小春の句　蕉翁の句　蕉芭の句と蕉村の句　新年の句　秋の滑稽の句　汚ない句　梅の句　時鳥の句　月並の句と月の意義　五月の句　女子と俳句　正岡子規の人物　俳句の修辭に就いて　俳句を作る者に告ぐ　作句の要訣二三　還句談

山崎宗鑑の句　西山宗因の句　虚栗調の句　連俳と俳句との關係　俳句と川柳との句別　俳句と和歌と漢詩との關係

目次

同君著

◎鳴雪俳話と評釋（四版）

全一冊四六判美本　紙數三百八十二頁　正價金參拾八錢　郵稅金六錢

本書收むる所の評釋と俳諧は悉く翁の蘊蓄と抱負とを披瀝せしもの、人一度是を繙かんか俳趣味について作句の工夫に就いて俳句の將來に就いて、凡べて諸々疑念は氷解すべし。

伊藤松宇君編

◎新編蕪村凡董附合集

全一冊四六判　百九十八頁　正價金參拾錢　郵稅金六錢

三宅青軒君著

◎俳諧獨學

全一冊菊判　二百五十六頁　正價金貳拾五錢　郵稅金六錢

老鼠堂永機宗匠君編　（六版）

◎俳諧自在

全一冊菊半截　一二三〇頁　正價金壹圓　小包料十二錢

雪中庵雀志宗匠校閲　五乳人釣雪君著

◎俳諧提要

全一冊四六判美本　紙數三百五十五頁　正價金五拾錢　郵稅金八錢

本書掲ぐる處明心居士の御傘、親軍入道のはなび草等を初め、故人大家の垂戒示教せしもの多くは是れを收む。皆是れ斯道の奥義に關する珍書なれば世間又容易に得易からざるべし。

角田竹冷君編

◎芭蕉句集講義（新刊）

全一冊　春の卷（再版）　夏の卷　秋の卷　冬の卷（續刊）

洋裝四六判美本　紙數各冊三百頁　口繪寫眞版挿入　正價各金參拾八錢　郵稅各金六錢

俳壇空前の良書出たり。之を芭蕉句講義となす。實に本書は蕉翁一代の俳句千餘句に對し一々通釋を與へて餘蘊なし、苟も俳諧に志ある者乃至文學に趣味ある者之を座右に備へずして可ならんや。

四明翁　中川重麗君著

◎形似神韻 **觸背美學**（一名新俳諧美學）　全一冊菊判美本　紙數三百五十頁　正價金四拾錢　郵稅金六錢

本書は俳諧不離不足の理を推して繪畫、彫刻、演劇、能樂、建築、模樣等の藝術は勿論、非獨立の諸藝術にも及びパノラマ、ヂオラマ、活人畫、盆栽、盆景、園藝、儀式、作法の類に至るまで諸家の議論を引證して既明を下し、挿畫には ロダンの傑作あり、印象派の代表作あり、加ふるに多くの俳句を加へたるもの近時稀に見る珍書たり。

中川霞城君著　（石版彩色刷挿畫四葉入　全一冊菊判二五〇頁）

◎平易俗語 **俳諧美學**（四版）　正價金參拾錢　郵稅金六錢

天生目杜南君著

◎評傳 **芭蕉**　全一冊四六判　二百四十二頁　正價金參拾五錢　郵稅金四錢

趣味の向上を促し、擾々の俳壇を統一し、歿後二百餘年、尚兒童走卒に其名を知らるゝ芭蕉は詩人と稱せんよりも寧ろ偉人たり、著者往事を追想し當時の社會狀態より彼が經歷、行動、性格及び日常生活に至る迄洽薄なる材料の下に縱橫論議して俳人芭蕉の委曲を極む蓋し芭蕉傳の翹楚にして他に類なし。

星野麥人君　牡野望東君　合著

◎俳諧年表　全一冊菊判　二百八十六頁　正價金六拾錢　郵稅金六錢

本書は延德元年より明治年間に至る迄百十三年間世に知らるゝ俳人及び之に關する著名なる事蹟等總てを網羅せし年表にして近年稀なる珍書なり。

峯青嵐君編

◎俳句資料解釋（六版）　全一冊袖珍美本　紙數三百四十頁　正價金參拾錢　郵稅金四錢

本書は句作中に引用せる和漢の人物人倫を始とし、雅言漢語故事の出處を明にし名勝舊跡の由來勝景は勿論、著明なる神社佛閣の所在緣起を詳にし宮闕殿樓の結構高山大嶽河海湖郊の形勝を叙し、飛禽蟲介花卉百木の奇を說き、衣服飲食の調度漁農百工の器具に至るまで、一々其例句を擧げ十有餘の部門に分ち以て叮嚀に解釋を與へたり。

文學士鴻巢楨雨君　西村醉夢君　文學士坂元雪鳥君共著

◎新式解說 **俳句大辭典**（新刊）　全一冊四六判上製　紙數六百三十七頁　正價金壹圓參拾錢　郵稅金八錢

內藤鳴雪翁著

◎**俳句作法**（三版）　全一冊四六判美本　紙數三百二十四頁　正價金參拾五錢　郵稅金六錢

博文館發行文學雜著（各冊）裝釘洒瀟頗美本

故大和田建樹君著	散文韻文	雪月花	全一冊袖珍上製 紙數六百二十六頁	正價金參拾五錢 郵稅金六錢
同君著	散文韻文	深山櫻	全一冊袖珍上製 紙數七百二頁	正價金四拾錢 郵稅金八錢
同君著	散文韻文	藻鹽木	全一冊袖珍上製 紙數五百九十頁	正價金貳拾五錢 郵稅金六錢
同君著	散文韻文	野菊	全一冊袖珍上製 紙數四百九十頁	正價金四拾五錢 郵稅金六錢
大町桂月君著	美文韻文	黃菊白菊	全一冊袖珍上製 紙數四百二頁	正價金貳拾五錢 郵稅金六錢
鹽井雨江君著	美文韻文	暗影香疎	全一冊袖珍上製 紙數三百五十四頁	正價金貳拾五錢 郵稅金六錢
佐佐木信綱君 印東昌綱君著	美文韻文	磯馴松	全一冊袖珍上製 紙數四百十二頁	正價金貳拾八錢 郵稅金六錢
武島羽衣君著	美文韻文	霓裳微吟	全一冊袖珍上製 紙數三百六十八頁	正價金參拾五錢 郵稅金六錢
鹽井雨江君共 武島羽衣君著 大町桂月君著	美文韻文	花紅葉	全一冊袖珍上製 紙數四百二十二頁	正價金參拾錢 郵稅金六錢
與謝野寛君著	詩集	槲之葉	全一冊菊半截美本 紙數三百三十頁	正價金六拾錢 郵稅金六錢
土井晚翠君著		天地有情	全一冊袖珍上製 紙數二百三十頁	正價金貳拾五錢 郵稅金四錢
與謝野寛君作		うもれ木	全一冊袖珍上製 紙數二百六十八頁	正價金貳拾五錢 郵稅金四錢
小杉未醒君著		漫畫と紀行	全一冊菊判美本 紙數三百四十頁	正價金八拾錢 郵稅金六錢

博文館發行文學雜著（各冊）裝釘洒瀟頗美本

大町桂月君著		行雲流水	全一冊袖珍上製 紙數三百頁	正價金參拾錢 郵稅金四錢
同君著		關東の山水	全一冊四六判特製 紙數五百二十頁	正價金壹圓 小包料金八錢
同君著		一簑一笠	全一冊袖珍上製 紙數三百七十六頁	正價金參拾錢 郵稅金四錢
故大橋乙羽君著	增補	千山萬水	全一冊袖珍上製 紙數七百二頁	正價金五拾錢 小包料金八錢
同君著		續千山萬水	全一冊袖珍上製 紙數三百七十六頁	正價金參拾錢 郵稅金四錢
同君著		耶馬溪	全一冊袖珍上製 紙數七百二頁	正價金五拾錢 小包料金八錢
姉崎正治君著		花つみ日記	全一冊四六判上製 紙數六百頁	正價金壹圓冊錢 小包料金八錢
故齋藤緑雨君著		あられ酒	全二冊袖珍上製 紙數四百六十五頁	正價金貳拾五錢 郵稅金四錢
同君著		みだれ箱	全一冊袖珍上製 紙數三百九十八頁	正價金貳拾八錢 郵稅金四錢
大町桂月君著		大紘小紘	全一冊袖珍上製 紙數四百二十頁	正價金參拾錢 郵稅金四錢
同君著	桂月文集	雜林	全一冊袖珍上製 紙數三百十二頁	正價金貳拾八錢 郵稅金四錢
長谷川天溪君著		自然主義	全一冊四六判並製 紙數四百十六頁	正價金五拾錢 郵稅金六錢
樋口龍峽君著		時代と文藝	全一冊四六判並製 紙數三百五十六頁	正價金四拾五錢 郵稅金六錢

文學博士　幸田露伴君著

普通文章論

全一冊洋裝中判上製
正價　金七拾五錢
郵稅　金八錢

好評再版

文章に二あり、一は美術的文章にして一は實用的文章なり、世の作文難を唱ふる者は、畢竟文章に此二種あるを知らず、又は二種の特長如何を辨別せず、一種の混合文章を作成するに汲々として、實用文章か譯の分らぬ渦的文章に苦心せり、其到底滿足なる文章の作られざる所以怪しむに足らず、而して世界に於ける實用的文章の範圍は、極めて廣大無邊にして、所謂文章の七八分を支配し占領せり、これ文體が淺近、平凡、庸常、容易、簡單にして、然かも明晰なる人間に切實なる用途を與ふるものなればなり、幸田先生茲に感あり、近時作文書の汗牛充棟なるも、多く實用文章の性質を誤解せるを遺憾とし、遂に「如何にして普通文章を作るべきか」といふ問題を、最も明快に解決せられたり。作文難の士は、必ず一本を備へて先生の精論を熟讀翫味せられよ。

故小室屈山君著

文範　自然と社會

全一冊四六判美本
紙數四百六頁
正價　金五拾五錢
郵稅　金六錢

發兌元　東京本町　博文館

332
309

3

332
309

332
309

087121-000-1

332-309

しろ椿

沼波　瓊音／著

M45

DBE-0299